

巨根少年  
風俗に挑戦  
一躍ヒーローになる

〇〇の頃から同年代のはるか上をいく才能を発揮し、有名になった〇〇たちがいる。

例えば数学。

有名大学の主席レベルの知能を〇学校の頃から有し、難題を解き、学生顔負けのレベルの高さを披露するなど。

人とは違ったものを持つ〇〇はどこの世界にでも存在するものである。

話は全く別の角度になってくるが、身体面でも大人顔負けの〇〇が存在する。

ここで言っているのは身体能力のことではない。

持ち合わせた身体そのもののことだ。

そしてその機能的な部分も……。

〇学〇年生のタダユキは、まだ〇春期に差し掛かったばかりだというのに、立派な、それは立派な、立派すぎるほどの巨根の持ち主だ。

そんな彼は、自らが持ち合わせた馬鹿でかいペニスに似合うだけの性欲も同時に持ち合わせている。

つまり、まだ〇〇の枠内にいながら、成人男性以上のセックスが出来るのである。

そんなタダユキは、

“女の子のスカートの中が見えた” だとか、

“キスってどんな感じなんだろうな” とか、

“～～に彼女が出来たらしいぜ！”

なんて平凡なことを言っている同級生にため息が出ていた。

——僕はもう我慢できないっ！！——

彼がそう思うのも当然。

成人男性のような有り余る性欲が、泉のように湧き出てくる毎日なのだ。

そして彼は・・・勇気を出して街の繁華街にある一軒の風俗店の暖簾をくぐった。

店内には2人ほどの恐そうなお兄さん。そしてとっても綺麗なお姉さんが何人かいた。

タダヒトは、同級生たちに比べれが背丈も高いが、言ってもまだまだ見た目は華奢な〇〇。

「何だい？もしかしてお客さんじゃないよねえ？」

キロッとタダユキの姿を見てそう言ってきたお兄さんに、タダヒトは、

「僕お客さんだよ！！ほらっ！お金だってこんなに持って来たんだ！」

そう言って財布の中身をお兄さんに見せた。

色々あって、本当はいけないことなのだけど。

お兄さんはお金さえ払ってくれれば、とタダヒトを店の奥に案内した。

タダユキは待合室でとっても綺麗でムチムチのお姉さんと出会い、緊張しながらも挨拶。

「よ・・・よろしく・・・お、お願いしますっ！」

「あらあ凄く若いお客さん！！今日はお姉さんのこの体で楽しんでいってね！」

お姉さんはそう言ってニッコリ微笑み、タダヒトの小さな掌を光沢のあるエッチな衣装に包まれた大きなフルーツのようなおっぱいの上に乗せた。

“ムギユウウウウ”

タダヒトは赤色の蛍光灯が淫乱な雰囲気醸し出す薄暗い廊下をお姉さんに手をひかれて歩き、そして個室のドアを開いた。

密室。

もうたまらないっ！！

タダヒトは一気に裸になってみせた。

もうお姉さんとエッチなことをすることしか頭にないのだ。

お姉さんは、露わになったタダヒトの股間を見て思わず大きな声をあげそうになった。

「すっ・・・すっごおい！！こんなペニスをこんな子が持つてるの！？」

お姉さんよりも低いタダヒトの背丈。お姉さんにしてみれば、自分よりも背の低いような少年が持っていたあまりに不釣り合いな巨根に驚かずにはいられなかったのだ。

みるみる火照った様子になったお姉さん。頬が紅潮していくのが、ぼんやり薄暗い室内でも見てとれた。

「はやくセックスしたいわぁ！！仕事ってこと忘れちゃいそう！早くその美味しそうなおちんちん食べたいのお」

興奮した様子のお姉さんは、タダヒトが“脱いでよ”と言わなくても、急いで脱いでタダヒトと同様にすっぽんぽんになってしまった。

「これで準備万端ね、たっぷり裸で気持ちいいことしましょ！！」  
淫靡な頬笑みを浮かべ、タダヒトを見つめたお姉さん。

「んはぁ！！ああああ！！」

性的サービスが開始してものの5分で、全身ヌルヌルのローションまみれになり、お姉さんとタダヒトは激しく濃密に絡まり合っていた。

「こんな・・・ジュブブ、大きなおちんちんもったいないわよ、  
もっともっところからは気持ち良くなるために使わなきゃダメよ・・・  
ンジュブブチュルルル」

目一杯口で頬張って、丹念にそして濃密にペニスを舐めすすめるお姉さん。

——体験版はここまでです——